

〈新刊紹介〉

(価格は税込定価)

平山久雄著『中古音講義』

本書は著者が1980年代から1990年代にかけて東京大学で行った講義「中古音講義」の記録に基づいて編まれたものである。「中古音」とは『切韻』から推定される音韻体系を指し、広義には南北朝から北宋の音韻体系のことで、日本・朝鮮・ベトナムなどの漢字文化圏に伝わる漢字音を理解するうえで重要な位置を占める。

本書の構成は以下のとおりである。「§1 中国語音韻史の時代区分」, 「§2『切韻』と『廣韻』」, 「§3 反切」, 「§4『廣韻』反切の分析」, 「§5 韻図」, 「§6 中古音の音類」, 「§7 音価推定」, 「§8 推定音価に関する若干の問題点(一) 重紐をめぐる」, 「§9 推定音価に関する若干の問題点(二) 反切上字の用法からの推論を中心に」, 「§10 声調調値」, 「§11 中古音の音韻論的解釈」, 「§12 六朝末・唐初の南方標準音」, 「§13 唐代の音韻変化」, 「§14 現代北京語との対応」, 「§15 対応規則の例外」, 以上15章からなる。図表が補われ、巻末には索引を付す。(遠藤佳那子)

(2022年8月26日発行 汲古書院刊 A5判横組み 222頁 定価5,500円 ISBN 978-4-7629-6715-3)

青木博史・岡崎友子・小木曾智信編『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』

2021年に刊行された田中牧郎・橋本行洋・小木曾智信編『コーパスによる日本語史研究 近代編』に続く、中古・中世編である。

本書は〈展望〉〈論文〉〈解説〉からなり、それぞれ以下の内容から構成されている。〈展望〉として「コーパスによる中古・中世語の研究(岡崎友子)」, 「中古語の資料とコーパス(近藤泰弘)」が配され、〈論文〉として、次の論考が収録される。「『思ふ・見る・聞く』の「(ら)る」形——複合動詞と主体敬語——(吉田永弘)」, 「テ形補助動詞成立史概略, 拾遺(大木一夫)」, 「文相当句の名詞化(青木博史)」, 「希望表現の史的変遷——願望を中心に——(北崎勇帆)」, 「中古・中世前期における「ココロヨシ」, 「ココチヨシ」とその類義表現(池上尚)」, 「短単位 N-gram からみた『天草版平家物語』と『天草版伊曾保物語』の表現の特徴(渡辺由貴)」, 「コーパスデータから見る大蔵虎明本狂言集の漢字表記語(片山久留美)」, 以上7編である。〈解説〉として、「『日本語歴史コーパス』中古・中世のデータ構築について(小木曾智信)」, 「『日本語歴史コーパス 和歌集編』解説(松崎安子)」, 「『日本語歴史コーパス 鎌倉時代編Ⅰ説話・随筆』解説(池上尚)」, 「『日本語歴史コーパス 鎌倉時代編Ⅱ日記・紀行』解説(鴻野知暁・池上尚)」, 「『日本語歴史コーパス 室町時代編Ⅰ狂言』解説(市村太郎・渡辺由貴)」, 「『日本語歴史コーパス 室町時代編Ⅱキリシタン資料』解説(片山久留美・渡辺由貴)」, 以上6編が収載される。(遠藤佳那子)

(2022 年 10 月 27 日発行 ひつじ書房刊 A5 判横組み 327 頁 定価 4,400 円 ISBN 978-4-8234-1133-5)

橋村勝明著『中世真名軍記の研究』

従来日本語の研究対象としてはあまり取り上げられてこなかった中世の真名本、中でも軍記を対象として、その用字法や訓読法を研究する。本書の構成は以下のとおりである。「序章 真名本研究の意義」に続き、「第一章 真名本の漢字の用法 用字と訓」は「第一節 妙本寺本『曾我物語』の「則」字訓について」、「第二節 中世真名本に於ける「而」字の用法と訓について——妙本寺本『曾我物語』を中心として——」、「第三節 妙本寺本『曾我物語』の「是」字の用法とその訓について」、「第四節 妙本寺本『曾我物語』の訓読語について——実字訓を視点として——」、「第五節 妙本寺本『曾我物語』と内閣文庫蔵『源平闘諍録』とに於ける訓読語の共通性・差異性について」、「第六節 大分県立先哲史料館蔵『大友記』の「乃」字訓「イマシ」について」、「第七節『豆相記』の訓点について」、以上7節から構成される。「第二章 真名本の文構造 倒置記法と文末表示法」は「第一節 中世真名軍記の倒置記法について——『大塔物語』『文正記』を例に——」、「第二節 中世真名軍記に於ける倒置記法「有之」について」、「第三節『花月対座論』の転倒符について」、「第四節 聖藩文庫本『豆相記』に於ける「矣」字の用法について」、「第五節 中世真名軍記に於ける助動詞「ケリ」の表記について」、「第六節 中世に於ける助動詞「ケリ」の用字について」、以上6節からなる。「第三章 真名本の周辺」は「第一節『惟任退治記』に於ける表記差による本文異同について」、「第二節 東京大学史料編纂所本『加州官地論』について」、「第三節『平家物語』所収文書の漢文訓読語」、「第四節 平松家本『平家物語』の「於」字の用法について」、「第五節 松平本『文正記』に於ける古文の使用について」、「第六節 類義の熟字「比年」「頃年」「年来」について——中世真名本の用字の背景に関する一考察——」、「第七節 妙本寺蔵『いろは字』に於ける「和」注記について」、以上7節からなる。そして「結章」として「第一節 真名本の成立と展開——真名軍記を手がかりとして——」、「第二節 中世の漢字と訓——「既」字訓「カクテ」と「恣」訓「ユユシ」を通して——」、「第三節 中世後期真名軍記の背後」、以上3節を収め、全5章23節からなる。(遠藤佳那子)

(2022 年 11 月 11 日発行 汲古書院刊 A5 判縦組み 397 頁 定価 11,000 円 ISBN 978-4-7576-1044-6)

築島裕著『築島裕著作集 第五巻 音韻と表記史』

本書は『築島裕著作集』全八巻のうち第五巻にあたり、音韻・アクセントや表記、声点・濁点などに関わる論考を収録する。

本書の構成は次のとおりで、大まかに関連する内容ごとにまとめられている。「(音韻の問題) 源氏物語・枕草子」、「浄辨本拾遺和歌集所載のアクセントに就いて」、「金澤文庫蔵本解説文義聴集記所載の國語アクセントについて」、「古代の文字」、「萬葉集歌謠に

おける返讀字について」,「萬葉集の動詞の語尾表記について」,「萬葉集の表記についての二三の問題」,「片假名の歴史的研究」,「平安時代における假名字母の變遷について」,「平安時代の假名と言葉」,「平安時代の訓點資料における古體假名の傳承について」,「濁點の起源」,「古點本の片假名の濁音表記について」,「濁音符の起こり」,「假名聲點の起源と發達」,「日本人と假名」,「平假名と弘法大師」,「假名文字の成立」,「多賀城跡漆紙文書假名文書について」,「假名遣いの歴史」,「假名遣の原理について」,「地名の漢字表記」,以上である。(遠藤佳那子)

(2022 年 11 月 28 日発行 汲古書院刊 A5 判縦組み 580 頁 定価 19,800 円 ISBN 978-4-7629-3625-8)

青木博史・小柳智一・吉田永弘編『日本語文法史研究6』

本書では日本語文法史の論考 5 本に加え,「小特集 言語対照」を組み 4 本の論考を収載する。

小特集の論考は以下のとおりである。「自然発生(自動詞)から自発へ——古代日本語と現代スペイン語の対照——(志波彩子)」,「中古日本語における敬語抑制のシステムについて——韓国語との対照を含めて——(澤田淳)」,「宮良方言の *sikeehuN* の意味と機能(荻野千砂子)」,「対照方言学的観点からみた存在表現の歴史変化の様相(酒井雅史)」,以上からなる。また通常の研究論文には,「類推・追(小柳智一)」,「原因・理由と話者の判断(北崎勇帆)」,「中古京都方言の主文終止形節における格体系——格配列,相互識別,ハダカ現象,示差的目的語標示——(竹内史郎)」,「『大藏虎明本狂言』の受益型行為指示表現——行為指示表現の変化の起こるところ——(森勇太)」,「近世・近代におけるデキルの発達とナルの衰退(三宅俊浩)」,以上 5 本が収録される。「テーマ解説」には「複合辞(吉田永弘)」,「文法史の名著」として湯沢幸吉郎著『室町時代の言語研究』(青木博史)が取り上げられている。なお巻末に「日本語文法史研究文献目録 2020-2021」を付す。(遠藤佳那子)

(2022 年 11 月 30 日発行 ひつじ書房刊 A5 判横組み 279 頁 定価 4,400 円 ISBN 978-4-8234-1173-1)

小林隆編『全国調査による感動詞の方言学』

本書は,感動詞の全国調査の結果をもとに感動詞の地域差・地域性の実態を多様な角度から取り上げる論文集である。狭義の感動詞のほか,歓声・かけ声・意志表示・挨拶などの広義の感動詞に関する。全国 800 地点を越えるデータを対象とする。形態と意味の視点からだけではなく,それが発せられる文脈や場面に着目した運用面を捉える論考も多い。

「Ⅰ 調査概説」には,「感動詞の全国調査(小林隆)」。「Ⅱ 項目別考察」には,「困惑・諦め・苛立ちの言語表現にみる地域差(竹田晃子)」,「「憤慨」表現の地域差——罵倒語とその周辺——(田附敏尚)」,「満腹時に用いられる感動詞の地域差(櫛引祐希子)」,「子どもをほめる言い方の地理的傾向(椎名渉子)」,「人を叱るときの感動詞(坂喜美佳)」,「か

らかいの方策とその地域差（津田智史）,「感動詞・副詞等の伝播と不使用地域の分布——「促す」「引き取る」「引き受ける」の分布から——（松田美香）,「御輿を担ぐ際に発するかけ声の地域差（作田将三郎）,「咳とくしゃみの方言感動詞——オノマトベとの境界の言葉——（川崎めぐみ）,「他家訪問のあいさつの分布と形成過程（中西太郎）,「謝罪と感謝の挨拶表現形式の分布と地域的特徴（船木礼子）.「Ⅲ 視点別考察」には,「汚い」「美しい」を表す幼児語の考察——「バッチャー類」「アップバ類」「ベベ類」を中心に——（友定賢治）,「感激」を表す二連鎖感動詞類の認知プロセス——統一的な理論的枠組みを目指して——（有元光彦）,「感動詞「ナンダベ」の用法と地理的分布（小林隆・勝又琴那）.末尾に,「索引」と「執筆者紹介」が付く。（椎名渉子）

（2022年11月30日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 307頁 定価5,500円 ISBN 978-4-8234-1167-0）

庵功雄編著、志波彩子・村上佳恵・大関浩美・定延利之・前田直子・菊地康人・増田真理子著『日本語受身文の新しい捉え方』

本書は、現代日本語の受身文（受動文）の新しい捉え方の提案を目的とし、日本語学・日本語教育学の多様な視点からの論考をまとめた論文集である。日本語学・日本語教育学における受身文研究の概観のほか、母語話者コーパス・日本語学習者コーパスを用いた論考、母語話者の意識調査を土台とした受身文の「視座」を捉える論考、日本語教科書の受身文の検討とともに教授法を提案する論考などがある。

「まえがき」に続き,「第1章 日本語学における受身構文（志波彩子）,「第2章 初級の日本語の教科書の受身の取り扱い（村上佳恵）,「第3章 母語話者コーパスから見た日本語の受身文（庵功雄）,「第4章 日本語学習者コーパスから見た受動文（大関浩美）,「第5章 受動文の視座（定延利之）,「第6章 「受動文」から「受身文」へ——受身の捉え方と受身の指導——（前田直子）,「第7章 日本語教育の受身の指導法改善と、被害の有無の識別法——〈さし向け〉による受身の捉え直しと、その日本語学への提案——（菊地康人・増田真理子）.末尾に「執筆者紹介」を付す。（椎名渉子）

（2022年12月23日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 212頁 定価3,520円 ISBN 978-4-87424-922-2）

椎名美智・滝浦真人編『「させていただく」大研究』

本書は、言語学分野の多様な角度から「させていただく」という形式が用いられるようになった理由・背景とその実態に迫る論文集である。「させていただく」を捉える際のキーワードとして本書に通底しているのが敬意漸減である。周辺の言語事象との共時的・通時的関連にも触れるほか、漫才やグルメサイトといった身近な素材を対象にした論考も収められる。その他、各章の執筆者による興味深いコラムもあり、研究者だけでなく初学者や一般の読者にも読みやすい構成となっている。

本書は2部構成となっており,「はじめに」に続き第Ⅰ部には「特別寄稿:「させてい

ただく」は敬語体系の欠陥を補う（飯間浩明）」、「幻の講演を再現：敬語の歴史社会言語学——関西起源のテイタダク——（井上史雄）」、「コラム 標準語の鍾乳洞モデルとテイタダク（井上史雄）」。「第Ⅱ部「第Ⅰ章 敬意漸減——すり減って止まない敬意が引き起こすこと——（滝浦真人）」、「コラム 心優しい日本人？（滝浦真人）」、「第Ⅱ章 テモラウの依頼用法——テイタダク成立への契機——（荻野千砂子）」、「コラム 琉球語には「～ていただく」形式がない!?（荻野千砂子）」、「第Ⅲ章 漫才談話の結末句の機能と変遷——「やめさしてもらおう」をめぐる——（日高水穂）」、「コラム 「これをあなたにもらってもらいましょう」——「あげましょう」にあたる申し出表現——（日高水穂）」、「第Ⅳ章 「させていただく」の地域差は、どういう地域差なのか——世論調査と「食べログ」調査にみる——（塩田雄大）」、「コラム 似てるからって油断するなよ——日本語「差し上げる」と韓国語「トゥリダ」——（塩田雄大）」、「第Ⅴ章 参与者追跡の観点から見た「させてもらう」の機能（山田敏弘）」、「コラム うっせえ うっせえ うっせえわ 書かれているよりも健全です！（山田敏弘）」、「第Ⅵ章 「させていただく」はなぜ一人勝ちしたか？——ベネファクティブの変遷に見る敬意漸減プロセス——（滝浦真人・椎名美智）」、「付録 『「させていただく」大研究』までの足跡（滝浦真人・椎名美智）」、「コラム 「させていただく」のこれから——「美化語」を目指す敬語たち——（椎名美智）」、「コラム 「みなさまが～ていただく」？「みなさまに～ていただく」？——助詞のシフトで、何が変わるのか？——（椎名美智）」。「末尾に「執筆者紹介」と「あとがき」が付く。（椎名渉子）（2022年12月23日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 332頁 定価3,960円 ISBN 978-4-87424-924-6）

尾山慎著『日本語の文字と表記——学びとその方法——』

本書は日本語の文字・表記について、従来の研究を概説しつつ、文字・表記を考える際の視点や方法論について多角的に取り上げる。敬体で叙述され、各章にコラム、巻末には「主要語句説明」を付し、当該分野の初学者へも好適であろう。

以下のように全7章14節からなる。「はじめに」に続き「第一章 日本語の文字表記の“多様さ”とその歴史的要因」には「Ⅰ 日本語の文字表記の実情と歴史」、「Ⅱ 漢文訓読と日本語」、「第二章 文字論・表記論・書記論へ」には「Ⅰ 文字・表記・書記の違いと研究する視点」、「Ⅱ 文字の種類と記号論」、「Ⅲ 言語学的なアプローチと方法論」、「第三章 言語学的なアプローチと方法論」に「Ⅰ 言葉の基本的な特徴と文字・表記」、「Ⅱ 個別と一般、歴史と現在」、「第四章 漢字の使い道と日本語、そして社会」には「Ⅰ 漢字の始まりとその特性」、「Ⅱ 社会における文字・表記とその実態」、「第五章 仮名のはなし」に「Ⅰ 「仮名」の成立とその定義」、「Ⅱ 万葉仮名」、「Ⅲ 平仮名・片仮名、そして仮名遣い」、「第六章 SNSメディアにみる通俗的な文字表記」に「Ⅰ 新しいメディアと位相」、「Ⅱ 現代日本語文字表記の新たな相棒」、そして「終章 日本語文字表記論の未来」、「おわりに」で締め括られる。（遠藤佳那子）

（2022年12月25日発行 花鳥社刊 A5判縦組み 322頁 定価2,970円 ISBN 978-4-909832-69-6）

陳冬妹著『話し言葉における受身表現の日中対照研究』

本書では、現代日本語・中国語のテレビドラマや英語の会話文を対象とし、話し言葉における受身表現の使用傾向の特徴を考察する。日中受身表現の使用傾向の共通点と相違点の全体像を、意味的機能と談話的機能を軸にまとめている。著者が2019年に大阪大学に提出した博士論文をもとに加筆・修正し、ひつじ研究叢書言語編第192巻として刊行された。

構成は次のとおりである。「まえがき」,「序章 インTRODクシヨン」に続き,「第1章 先行研究の整理」,「第2章 述語動詞からみる日中受身表現の意味的機能」,「第3章 主語の選択からみる日中受身表現の談話的機能」,「第4章 日中受身表現の使用頻度の差」,「終章 結論」。末尾に「参考文献」,「あとがき」,「索引」が付く。なお、本書は北京外国語大学中央高校基本科学研究費(課題番号2021JJ011)の助成を受け刊行された。(椎名渉子)

(2023年1月10日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 248頁 定価7,040円 ISBN 978-4-8234-1151-9)

李澤熊著『現代日本語における意図性副詞の意味研究』

本書は、認知言語学のアプローチに基づき,「うっかり」「つい」「さり気なく」「それとなく」などの意図性が関与する22語を対象とし、現代日本語の副詞的成分の意味用法について論じる書である。名古屋大学大学院国際言語文化研究科に提出した博士論文をもとに、ひつじ研究叢書言語編第193巻として刊行された。

本書の構成は次のとおりである。「第1章 はじめに」,「第2章 意味分析の方法」,「第3章 副詞とは何か」,「第4章 意図性副詞とは何か」,「第5章 意図性に関わる22語の階層構造」,「第6章 グループ間における連続性の検証」,「第7章 非意図性副詞AⅠグループ「つい、うっかり(と)、うかうか(と)、うかつに、うかつにも」の意味分析」,「第8章 非意図性副詞AⅡグループ/AⅡ'グループ「思わず、無意識に、我知らず(に)、知らず知らず(に)、いつの間にか、いつしか」の意味分析」,「第9章 非意図性副詞AⅢグループ「何となく、何だか、何気なく、それとなく(Ⅱ)、どことなく」の意味分析」,「第10章 意図性副詞BⅠグループ/BⅡグループ「さり気なく、それとなく(Ⅰ)、敢えて、強いて、無理に、無理矢理(に)」の意味分析」,「第11章 意図性に関わる22語の副詞における位置付け」,「第12章 おわりに」。末尾に「引用文献」,「あとがき」,「索引」を付す。なお、本書は日本学術振興会の令和4年度研究成果公開促進費(課題番号22HP5059)の助成を受けて刊行された。(椎名渉子)

(2023年1月31日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 348頁 定価7,700円 ISBN 978-4-8234-1171-7)

馬場治著『宣命体の研究——表記と文章の諸相——』

本書は「序論」に続いて大きく三部から構成されており、宣命体による表記と文章に

ついて、その実態と背後にある国語意識について考究するものである。「第一部 天皇と宣命体（『続日本紀』宣命に関するもの）」は「〔前編〕表記と訓読」,「〔後編〕文章と表現」に分けられる。「第二部 説話・縁起の宣命体（『風土記』逸文・『元興寺縁起』に関するもの）」には、「第一章 蘇民将来説話の宣命体——縁起と奏宣——」,「第二章 夢野起源説話の宣命体——口誦と記載——」,「第三章 元興寺縁起の宣命体について——小字仮名と倒置表記——」以上の3章が配され、「第三部 宣長・久老の宣命体（本居宣長・荒木田久老の著述に関するもの）」は「第一章『古事記伝』における宣命の引証——古語の格と助辞——」,「第二章『玉勝間』における祝詞宣命の言説——古記録と儀式書——」,「第三章 荒木田久老訓点『續日本紀宣命』の句読点——切れと続き——」以上3章からなる。「結論 宣命体の本質と国語意識」,巻末には付録として「五国史所載宣命発布年月日表」が付される。（遠藤佳那子）

（2023年2月8日発行 汲古書院刊 A5判縦組み 602頁 定価15,400円 ISBN 978-4-7629-3679-1）

上田功著『獲得と臨床の音韻論』

本書は、幼児の言語獲得における傾向と個人差の問題を音韻論の立場から解明することをめざした書である。一見、誤構音と見なされ得る発話データを音韻理論に基づいて検証すると規則性が見出されるなど、臨床の場において音韻理論がどのように貢献するかという点を多様な事例から明らかにしている。

本書の構成は次のとおりである。「まえがき」に続き、「第1章 序論」,「第2章 初期の音韻理論による音韻獲得の分析」,「第3章 より合理的な説明を求めて——音韻理論の発展と獲得研究——」,「第4章 基底の素性指定と語彙拡散による音韻変化」,「第5章 音獲得順序のパラドクス」,「第6章 継続性のある音韻体系の記述を求めて——最適性理論——」,「第7章 音韻理論が明らかにする臨床例の隠された問題」,「第8章 まとめと今後の展望」。末尾に「おわりに」,「引用文献」,「索引」を付す。なお、本書は日本学術振興会の令和4年度研究成果公開促進費（課題番号22HP5061）の助成を受けて刊行された。（椎名渉子）

（2023年2月22日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 168頁 定価5,500円 ISBN 978-4-8234-1177-9）

川瀬卓著『副詞から見た日本語文法史』

日本語の副詞について個別の史的研究を重ねつつ、それらを文法史に位置付けて日本語の動態を明らかにしようと試みる一書である。「序章 副詞の歴史的研究における課題」に続き、本書は全3部10章からなる。「Ⅰ 副詞の歴史と文法変化」に、「第1章「そろそろ」の史的変遷」,「第2章 叙法副詞「なにも」の成立」,「第3章 近世における「どうも」の展開」,「第4章「どうやら」の史的変遷」が配される。「Ⅱ 副詞の歴史と日本語の時代的動向」には、「第5章「ひょっとすると」類の成立と呼応の分化」,「第6章「どうぞ」の史的変遷と行為指示表現の歴史」,「第7章 前置き表現から見た行

為指示における配慮の歴史」,「第8章 感謝・謝罪に見られる配慮表現「どうも」の成立とその普及」,「Ⅲ 副詞の歴史的研究から日本語文法史研究へ」には「第9章 副詞から見た古代語と近代語」,「第10章 副詞の歴史から見えてくること」が収められる。(遠藤佳那子)

(2023年2月22日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 236頁 定価7,920円 ISBN 978-4-8234-1174-8)

小林隆著『語用論的方言学の方法』

本書は、著者のこれまでの研究成果がまとめられたものであり、方言学に語用論的な視点を取り入れ、研究の枠組みや方法論を示しながら具体的な言語現象を論じるものである。その際、言語運用における多様な言語現象に通底する「言語的発想法」という視点から、日本語方言における語用論的な地域差を示す。本書はひつじ研究叢書言語編第191巻として刊行された。

本書は3部構成となっており、「まえがき」,「序章 語用論的方言学への誘い」に続く第Ⅰ部では「原理・方法論」に関する論考がまとめられている。「第1章 語用論的方言学の目的と方法」,「第2章 語用論的方言学の視点「言語的発想法」について」ほか3編。第Ⅱ部の「各論」では、「(1) 言語行動・談話」,「(2) オノマトペ・感動詞」,「(3) 文法」に分かれており,「(1) 言語行動・談話」には「第6章 挨拶における定型性の地域差——談話から見た朝の挨拶——」,「第10章 会話に見る依頼と受託の姿——気仙沼市の場面設定会話から——」など,「挨拶・儀礼」,「依頼・受託」,「全般」と区分された9編の論考が収められている。続く「(2) オノマトペ・感動詞」には「第15章 オノマトペの地域差と歴史——「大声で泣く様子」について——」,「第16章 オノマトペへの志向性の地域差——言語的発想法から見る——」ほか4編が収められている。「(3) 文法」には「第21章 文法的発想法の地域差とその成立」,「第22章 擬似的文法表現の地理的傾向——とりたての発想法をめぐって——」が収められている。第Ⅲ部の「総論」は「第23章 東北方言の特質——言語的発想法の視点から——」,「第24章 発話態度の地域差——自己と話し手、自己と他者——」,「第25章 言語的発想法の歴史——地理と歴史の相関への見通し——」から構成され,「終章 結論と課題——語用論的方言学のこれらに向けて——」で結ばれる。末尾に「参考文献」,「既発表論文との関係」,「索引」を付す。本書は日本学術振興会の令和4年度研究成果公開促進費(課題番号22HP5064)の助成を受けて刊行された。(椎名渉子)

(2023年2月22日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 592頁 定価9,680円 ISBN 978-4-8234-1150-2)

山本佐和子著『抄物の言語と資料——中世室町期の形容詞派生と文法変化——』

本書は中世室町期の「抄物」の言語を対象とし、日本語の史的変遷と、抄物の歴史的・文化的背景と、以上2点について考察するものである。

本書の構成は以下のとおりである。「序文(木田章義)」,「序章」に続いて,「Ⅰ 新シ

ク型形容詞の派生」には「第一章「きぶい（酷）」の語誌」,「第二章「いかめい」の語誌——「いかめしい」「いかい」との関わり——」,「第三章 新シク型形容詞の派生について——中世室町期におけるク活用形容詞からの派生を中心に——」,「第四章 形容詞の活用型と意味分類——付「対象語」「形容詞文」——」以上4章を収載する。「Ⅱ 語の変化と文法変化との交渉」には「第五章「ツベイ」と「ツベシイ」——助動詞「ベシ」のシク活用化について——」,「第六章 モダリティ形式「ラシイ」の成立」,「第七章 中世室町期における「ゲナ」の意味・用法——モダリティ形式「ゲナ」の成立再考——」,「第八章 モダリティ形式「サウナ>ソウダ」再考——名詞に後接する用法をめぐる——」,「第九章 中世室町期における「ねまる」の意味・用法」以上5章を収載する。「Ⅲ 抄物の史的展開」には「第一〇章 建仁寺両足院蔵「杜詩抄」の成立をめぐる——抄物と室町期の文化試論——」,「第十一章「杜詩抄」の文末表現「～チャ」について」,「第十二章 五山・博士家系抄物における濁音形〈候〉について」,「第十三章 中世室町期の注釈書における「～トナリ」の用法」以上4章を収録する。「Ⅳ 抄物研究の可能性」には「第一四章「彭叔守仙抄古文真宝抄」の諸本について——大名高家が求めた仮名抄——」,「第一五章 大阪府立中之島図書館蔵『増刊校正王状元集註分類』東坡先生詩』の書誌的考察・翻刻——東坡詩の抄物の受容と展開の一例——」,「第一六章 京都大学文学研究科図書館寿岳文庫蔵「古則間書零本」解題・翻刻」以上3章を収録する。最後に「終章」および「〔付録〕抄物の利用法——抄物による言語研究の継承と展開——」を収める。(遠藤佳那子)

(2023年2月25日発行 くろしお出版刊 A5判縦組み 452頁 定価7,480円 ISBN 978-4-87424-932-1)

井戸美里著『現代日本語における否定的評価を表すとりたて詞の研究』

本書は、現代日本語の否定的評価を表すとりたて詞「など」「なんか」を中心に、その形態・統語的特徴と意味的特徴を捉える書である。とりたて詞研究において否定的評価を表すとりたて詞は周辺の扱いを受けることが多いが、本書ではそれらに焦点を当て、否定的評価の含みの表示方法に2つのタイプがあることを主張する。

本書の構成は次のとおりである。「第1章 序章」,「第2章 「とりたて詞」とはどのような語群か」,「第3章 とりたて詞の階層構造と意味」,「第4章 否定的評価を表すとりたて詞の2種」,「第5章 否定的評価を表すとりたて詞の統語的位置と意味」,「第6章 否定的評価を表すとりたて詞に後接するハと否定のスコップ」,「第7章 とりたて詞における否定辞との呼応と前提集合の有無」,「第8章 結論」。末尾に「参考文献」と「索引」が付く。なお、本書は日本学術振興会の令和4年度研究成果公開促進費(課題番号22HP5065)の助成を受けて刊行された。(椎名渉子)

(2023年2月28日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 176頁 定価3,960円 ISBN 978-4-87424-927-7)

松岡和美・内堀朝子編著『手話言語学のトピック——基礎から最前線へ——』

本書は、手話言語学に関する各トピックの基礎知識と最新の研究動向が得られる概説書兼研究書である。手話音韻論、統語現象、意味に関わる現象、手話の多様性などのトピックで構成される。

各章は「基礎編」と「最前線編」の2部構成となっている。本書の目次には「基礎編」の見出しタイトルは記載していない。編者による「まえがき」に続き、「第1章 イントロダクション（松岡和美）」には「基礎編」と「最前線編」手話言語学の発展。「第2章 類型論（相良啓子）」には「基礎編」と「最前線編」数詞の類型論。「第3章 プロソディ（下谷奈津子・前川和美）」には「基礎編」と「最前線編」日本手話のうなずきとその習得——母語話者と学習者の比較——。「第4章 複合語（浅田裕子）」には「基礎編」と「最前線編」動詞由来複合語の統辞分析——日本語と日本手話の観察から——。「第5章 文末指さし（内堀朝子・今西祐介・上田由紀子）」には「基礎編」と「最前線編」文法的な一致を示すものとしての文末指さし。「第6章 省略（坂本祐太）」には「基礎編」と「最前線編」空項の理論的分析：動詞残余型動詞句省略か、項省略か、空代名詞か？。「第7章 焦点（平山仁美）」には「基礎編」と「最前線編」手話言語の焦点の意味論・語用論的分析。「第8章 メタファー（高嶋由布子・富田望）」には「基礎編」と「最前線編」手話のメタファー分析の試み。「第9章 手話の発生（矢野羽衣子）」には「基礎編」と「最前線編」宮窪手話の言語学的特徴。「第10章 マウス・アクション（岡田智裕）」には「基礎編」と「最前線編」マウス・アクションの使用実態の分析」。末尾に「索引」と「執筆者一覧」を付す。（椎名渉子）

（2023年2月28日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 292頁 定価3,850円 ISBN 978-4-87424-928-4）